

WEB限定記事「水の風土記」最新記事のご紹介

魅力あふれる独自の「水の文化」を培っている「人」や「事・場」をお訪ねして、そこで行なわれている研究や活動をホームページで紹介しています。ぜひご覧ください。

水の文化 人ネットワーク

コロナ後の世界をどう生きるか? 「水」の視点から

Webで公開中!



ウガンダ・カンパラ市のカスビ食品市場に設置された共同の手洗い場。これは新型コロナウイルスの蔓延を抑制するための緊急対応の一環で、石鹸と安全な水（塩素系）を備えている ©WaterAid/ James Kiyimba

新型コロナウイルスの感染が世界各国で広がるなかで際立つ「水」の大切さ、そして気候変動に伴い頻発する「水害」への備え、さらに経済活動を担う企業が今後注意すべき「水リスク」などについて、水ジャーナリストの橋本淳司さんにお聞きしました。

http://www.mizu.gr.jp/fudoki/people/065_hashimoto.html



橋本淳司さん
はしもと じゅんじ

7月より

「水文メールマガジン」をリニューアルしました

機関誌読者、メルマガ登録者向けに配信している水文メールマガジンをリニューアルいたしました。

リニューアルしたメールマガジンでは、機関誌『水の文化』の見どころやイベント情報、HP更新のお知らせなど、センターの活動に関する情報を写真とともにお届けいたします! ご登録がまだの方は、ぜひこの機会に登録ください。ご登録は下記リンクのお問い合わせフォームよりお申し込みください。

<https://www2.mizkangroup.co.jp/customer/group/mizu.html>



(左) 祖母と水を汲んで、歩いて持ち帰る8歳の少女。安全な水をいつでも手に入れられるしくみはまだまだ足りない (右) 保護されていない水源から水を集める少年たち。地球上のすべての人が清潔な水を利用できるようにしたい

©WaterAid/ Eliza Powell

機関誌『水の文化』64号に関する訂正とお詫び

『水の文化』64号の記事について誤記がありましたので、お知らせいたします。

p3「ひとしづく」本文

誤 赤や黄色などの波長の長い光線を跳ね返すようになり、

正 紫外線に近い青色光線は水河という物体を通過できないため、

すでにお手元に届いている読者の皆さまに訂正してお詫びいたします。

機関誌『水の文化』制作にあたって

ミツカン水の文化センターで発行しております機関誌『水の文化』65号につきましては、コロナ禍の影響により取材活動を休止しておりましたが、5月14日の緊急事態宣言の解除を受けまして、リモートでの取材や取材にあたるスタッフ数を減らすなどの感染防止対策を徹底し、取材活動を再開いたしました。また、取材先の皆さまには、顔写真撮影に際しましてはマスクを外していただくなどのご協力をお願いしました。

通常よりも発行の間隔が空いたうえ、連載「食の風土記」と「魅力づくりの教え」はやむを得ず休載となりましたが、このたび発行することができました。

このような状況で取材にご協力いただきました方々に、心より感謝申し上げます。

【訪問取材時に行なった感染防止対策】

- ①取材スタッフは最少人数とする
- ②訪問前には手指の消毒と検温を実施する
- ③マスクやフェイスシールドを着用する
- ④真正面の会話は避け、対面する場合は適切な距離を保つ

66号以降も上記の感染防止対策を徹底したうえで、機関誌『水の文化』を制作してまいります。

水の文化 Information

■「水の文化」に関する情報をお寄せください

本誌「水の文化」では、今後も引き続き「人と水のかかわり」に焦点をあてた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根ざした調査や研究がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

■ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください。

<http://www.mizu.gr.jp/>

■水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページからPDFファイルとしてダウンロードできるほか、冊子をご希望の方はホームページの「最新号のお申し込みボタン」からお申し込みいただけます。どうぞご利用ください。

■「水にかかわる生活意識調査」ホームページで公開中

20年以上にわたり、ほぼ同じ内容で日常生活と水とのかかわりや意識、水と文化に関する生活意識調査を実施しています。結果はすべて公開していますので、ぜひご利用ください。

皆さまの感想を お待ちしております！

『水の文化』65号について、アンケートにご協力ください。
今後の機関誌をよりよくしていくための参考にさせていただきます。

◆アンケートへの回答はこちらから。

<http://www.mizu.gr.jp/form65.html>



※アンケート用紙をお持ちの方は、FAXまたはメールにて
下記へご返信いただく形でも結構です。

FAX: 03-3568-4025

メールアドレス: mizubun@mizu.gr.jp

編集後記

取材でお会いした方々を思い返し、船乗りとはどんな人たちかと問われたら、海という大自然の中で、人の持つ能力やその営みがちっぽけなものであることを受け入れた上で、その懐に抱かれていくことに喜びを感じている人と答えると思う。(五)

物腰は柔らかく穏やかで、けれどどこか強さがある、というのが取材先のみなさまに共通する印象でした。人間の思い通りにはならず、時には命を脅かす海と向き合い続ける中で培われた達観、あるいは覚悟と言いつ換えられるのかもしれない。(瑞)

船に乗ることは、陸から見ることのできない特別な景色を見ることができると、というイメージでした。今回の記事を読んで、その特別な景色は、安易なものではないのだと思いました。また、船乗りの水意識を知り、自分の水意識を改めてたいと思いました。(青)

特集記事内に、ひとり洗面器二杯分の水で生活という一文を見つけた時には、水を子どもプールに注ぎ込む勢いを弱めてしまいました。水位の低いビニールプールに我が子は不満そうでしたが、もっと節水せねばと強く思うのでした。(飯)

ホクレア号を追っていた時期がある。出航日、航海を伝えるサイトを何度も訪問したが更新されない。風待ちだった。結局、旅立ちの数日後。大自然の懐にすっと入り、その力を借り目的を果たす。憧れの旅を経験した方の生の言葉が聞けた。(秋)

昔ヨーロッパに家具を輸送していたが、船便だと数ヶ月かかる。積み残すと航空便になって桁が一つ違う金額に焦った。当時は時間とコストしか考えていなかったが、特集を読んで、それぐらいの時間どっしり構えて余裕持て、とつくづく感じた。(力)

取材中に出会った船乗りはこう言った。「陸上の会議は決まったのか決まらないのか、はっきりしないまま終わるよね」と。海の上では常に決断を迫られる。見誤ると命が危ないからだ。陸の上でもそうした緊張感をもって日々決断したいと思う。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化 第65号

ホームページアドレス

<http://www.mizu.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中塾ビル

株式会社 Mizkan Partners

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

発行日

2020年(令和2年)9月初版1刷

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学未来ビジョン研究センター教授

古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会

陣内秀信 法政大学名誉教授

鳥越皓之 大手前大学学長

中庭光彦 多摩大学教授

制作

浦本五郎

久保田瑞季

青木広実

小林夕夏

久保悦史

飯野真奈実

編集製作

前川太一郎 編集

中野公力 デザイン・撮影

蔵田 豊 デザイン

執筆

秋山健一郎 (pp.10-13, pp.21-23)

佐々木 聖 (pp.6-9, pp.38-41)

手塚ひとみ (pp.24-25)

開 洋美 (pp.26-33)

前川太一郎 (pp.14-20)

撮影

大平正美 (p.27)

川本聖哉 (pp.6-13, pp.18-23, p.28)

藤牧徹也 (p.24)

印刷

中塾総合印刷株式会社